（続紙　１）

京都大学	博士（　教育学　）	氏名	井藤　元
論文題目	シュタイナー人間形成論における「自由」の構図 －試金石としてのゲーテ、シラー、ニーチェ－		

（論文内容の要旨）

本論文は、シュタイナー教育を根底で支える人間形成論に関する思想研究である。

シュタイナー学校が世界的な規模で関心を高めているのに対して、その思想研究は「人智学」という特異な理論のために敬遠されてきた。「序論」は、この点を詳細に検討し、先行研究を四類型に分類している。第一類型は「シュタイナー思想の概説」、第二類型は「シュタイナー学校の実践の概説」、第三類型は「シュタイナー思想の比較研究、および思想史的研究」、第四類型は「シュタイナー思想を他の理論を援用して読み解く試み」である。このうち、本論文は、第三類型と第四類型を統合した立場とされる。この二つの類型は、共に人智学を前提としない。同様に、本研究も「人智学特有の特殊な用語を用いることなく」思想を解き明かそうとする。しかも「他の思想を援用した読解」ではなく、その思想の出自を探る仕方で、人智学の言葉で語られる以前のシュタイナーの言葉を掘り下げようとしたものである。

こうした丁寧な先行研究批判の上に、本論文は、巧妙な方法論的戦略をもって問題を設定する。すなわち、思想研究を続けていた30代のシュタイナーに注目し、その思想遍歴を「思想研究者時代」「転換期」「霊的指導者時代」という三つの時期に分ける。しかし三部構成の叙述は、この時系列の順とは異なり、まず、第一部で「転換期」の思想がシラーの『美的書簡』（『人間の美的教育に関する書簡』）を中心に論じられ、第二部で「思想研究者時代」の思想がゲーテ自然科学、および、ニーチェ『ツァラトゥストラ』との対峙において検討され、第三部に至って「霊的指導者時代」の思想が、ゲーテ文学読解の変遷を通して、解明されている。

第一部「転換期」の思想は、シラーの『美的書簡』から抽出された「二世界の循環」の構図において解き明かされる。第1章において伝記的な事実が確認された後、第2章は、問題の多い『美的書簡』に関する詳細な先行研究批判である。この点に関しては「補論１」において再論され、シュタイナーによる解釈の妥当性が検討されている。しかし本論文の強調点は、シラーの哲学的原則の抽出ではなく、その原則がゲーテ文学の中に展開されている点にある。第3章は、シュタイナーが、ゲーテ文学の中にシラーの「遊戯衝動」の特殊な性格を見抜いている点を明らかにし、第4章は、シュタイナーによるシラー『美的書簡』解釈を解きほぐし、シラーの語る「美的状態」が現実から遊離した理想郷ではないことが論じられる。こうして「第一部」では、シュタイナーが、シラーの概念的思惟とゲーテの直観的思惟を重ね合わせ、哲学と文学とを立体的にとらえる視点に立ちつつ、シラーの語る「二世界の循環」を自らの思想の根幹に据えたことが明らかにされる。

（続紙　２　）

第二部「思想研究者時代」は、まず第5章「ゲーテ自然科学研究」において、生きた自然を解明する「直観」が論じられる。「精神的なるもの」は、感覚によって捉えることはできないが、「直観」によって捉えることができる。しかも自然を離れるのではない。自然の中に現れる「精神的なるもの」を捉える「ゲーテ的直観」をシュタイナーは強調した。この点が、後のシュタイナーの思想においては、＜「感覚的世界」の中に「超感覚的なもの」を捉える認識＞として展開されてゆく。第6章「ニーチェ研究」においては、シュタイナーがニーチェに共感しつつ、その思想に不満を感じた点をゲーテ的直観によって補完したこと、またニーチェの「超人」思想の内に、自らの「自由」の理念を見いだしたことが解き明かされる。第7章は『自由の哲学』の裏舞台を示したものであり、その哲学の根底に、先に見たシラーの「二世界の循環」の原則が潜んでいることを明らかにする。そして「一元論」の問題が検討される。シュタイナーは、シラーの二元論（二世界を前提にしたその循環）を前提にした上で、必要なプロセスを経た後に、一元論的な世界を目指していたことが示される。確かに後年の（人智学における）シュタイナーは「感覚世界」と「感覚を超えた世界（超感覚的世界）」を区別したが、それは「感覚世界」から離れるためではなく、「感覚世界」に縛られないためである。つまり二世界の区別が目的ではなく、まして「感覚を超えた世界」を強調することが目的ではなくて、＜感覚世界の中に「感覚を超えた世界」の現われを見る（ゲーテの用語では「直観する」）＞ことを目指していた。

第三部においては、「霊的指導者時代」の思想が、ゲーテ文学を通して検討される。同じ『ファウスト』についても、第8章「1902年の論考」と、第9章「1918年の論考」とを比べてみると、後者の方が、より秘教的色合いを強めている。つまり、同じ文学作品の解釈の仕方の変遷を明らかにすることによって、シュタイナーの思想の展開を跡付けている。同様に第10章は、ゲーテ『メルヒェン』に関する二つの論考を手掛かりに、その語り方の違いから思想展開を跡付けている。そうした考察を通して、シュタイナーがゲーテ文学の潜む謎を解明しようと試みながら、自らの思想を確認した点、しかもその時にも、シラーの基本原則は揺らぐことなく一貫していた点が示されている。

終章において、シュタイナーと三つの思想の関係が立体的に整理され、また、シュタイナーの思想を「人智学の言葉を用いることなく」解き明かすことの正当性が確認され、そして、＜感覚世界に縛られない自由＞、あるいは、＜感覚世界の中に「感覚をこえた世界」の現われを見抜く自由＞がシュタイナーの人間形成論の根幹であることが示されている。

注）論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は１頁を３８字×３６行で作成し、合わせて、３，０００字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、４００～１，１００wordsで作成し審査結の要旨は日本語５００～２，０００字程度で作成すること。

（続紙　３　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、シュタイナー教育の思想研究である。その思想の源泉を若きシュタイナーの思想研究のうちに求め、後年「人智学」と呼ばれることになる特異な理論を思想史的な文脈の中に位置づけてみせた研究である。

シュタイナーの思想は従来「オカルト的」と警戒され、シュタイナー学校への関心の高まりに反して、その思想研究は極めて手薄であった。それに対して、本論文は、その思想の源泉の一端を、ゲーテ、シラー、ニーチェのうちに確認することによって、「人智学の用語を用いることなく」、その思想の根幹を捉えようと試みた極めて独創的な研究である。そこには、幼少期の一時期をスイスのシュタイナー学校で過ごした井藤氏自身の問題意識、すなわち「オカルト的」とはまるで違う「楽しかった」学校の体験を誤解されずに伝達したいという一貫した問題意識が流れている。

本論文の優れた点は、その問題設定のための方法論的戦略である。第一に、30歳代のシュタイナーに焦点を当てた点。その時期のシュタイナーは、ゲーテ研究者であり、後年の（オカルト的と評される）人智学の言葉は一切用いていなかった。

第二に、その思想の源泉として、従来の先行研究が指摘する「カント・フィヒテ」からの影響に対して、「ゲーテ・シラー」からの影響に焦点を絞り込んだ点。つまり「哲学的地平」ではなく「文学的思想圏」に光を当てた点である。こうした「文学的思想圏」との関連を主題とした研究は、ドイツ語文献においても極めて稀であり、この着眼は高く評価されてよい。

第三に、そうした「文学的思想圏」におけるシュタイナーの思想の特徴を抽出する戦略の巧みさである。たとえば、シュタイナーはゲーテの『ファウスト』を通例とは異なる視点から解釈した。その解釈の特殊性に、井藤氏は、シュタイナー自身の自己投影を見る。つまり、読解のバイアスこそ、当時のシュタイナーの思想を如実に物語っていると見るのである。言い換えれば、この時期のシュタイナーは、まだゲーテの言葉によって、自分の思想を表現していた。「文学的思想圏」の言葉を通して、具体的には、「ゲーテの言葉によって・シラーの言葉によって・ニーチェの言葉によって」自分の思想を表現していた。そこで、本論文は、シュタイナーのシラー研究・ゲーテ研究・ニーチェ研究を読み解くことによって（それら相互の差異と連関を確認することによって）、その時期のシュタイナーの思想を立体的に描くことを試み、かなりの程度、成功している。

例えば、シュタイナーは、シラー『美的教育論（美的書簡）』の哲学をゲーテ文学と重ね合わせ、ゲーテの『ファウスト』や『メルヒェン』の中にシラーの哲学を見た。そうした相補的理解のうちに、哲学も文学もどちらも重視し、一方に還元することを拒否するシュタイナーの思想が読み解かれている。三部構成で展開される本論文は、こうしたシュタイナーのシラー研究・ゲーテ研究・ニーチェ研究の詳細な検討を行うことを通して、シュタイナーの思想の根幹を「人智学の用語を用いる

（続紙　４　）

ことなく」抽出したものである。

以上のような考察を通して確認された成果は以下の点である。

第一に、シュタイナーの人間形成思想にとって、シラー『美的教育論』が極めて重要な意味を持っていた点が確認された。正確には、ゲーテ文学に反映されたシラーの哲学がシュタイナーの思想の土台である。この点は、思想史におけるシュタイナーの位置をめぐる議論にひとつの明確な「仮説」を提示した点において評価されてよい。シラー『美的教育論』を中心に、一方にゲーテ文学、他方にカント哲学と結ばれる思想地平が、シュタイナー教育の思想史的源泉として示されたことになる。

第二に、ニーチェとの関連である。従来、ニーチェからの影響に関しては不明なことが多かったが、本論文によってある程度、明らかになった。すなわち、シュタイナーはニーチェの思想を、ゲーテの「直観」の思想によって補う仕方で独自に読み直し、それを通して逆にゲーテの「直観」を、人間の「自己認識」の問題として読み直す手掛かりを手に入れたことになる。

第三に、シュタイナーの思想の根本理念である「自由」の問題。その「自由」は、好き勝手な自己中心主義ではなく、また（一義的には）社会的権力からの解放でもなく、むしろ、自らの内なる「精神的geistigなもの」を直観すること、それによって「感覚世界」に縛られないことである。しかし「感覚世界」を離れてしまうのではない。「感覚世界」の中で同時に「感覚世界を超えた次元」を生きることのできる「自由」。そうした「自由」に至る探求こそ、シュタイナーの思想を一貫して流れる根本的課題であることが「人智学の用語を用いることなく」解き明かされたことになる。

試問においては、いくつかの問題点も指摘された。たとえば、本論文が捨象した問題、すなわち、カント・フィヒテ哲学との関連への言及が少なく、人智学との関連を考察から外したことによって、思想の全体像の理解としては弱くなった点。また「統合」「融合」「循環」「矛盾」などの術語に曖昧さが残り、論証が明示的に為されていない箇所がある点、などが指摘された。しかしこれらの点は、今後の課題として理解され、本研究の学位論文としての価値をいささかも減ずるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また平成２３年２月４日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降